

## 2025年12月21日 説教「聖なる方の誕生」

ルカの福音書1章26~38節

本日はクリスマス礼拝です。救い主がお生まれ下さったという、大なる喜びの出来事をルカの福音書1章から学んでいきましょう。

### 1. ナザレの女性の所に来た御使い (26~29節)

①御使いガブリエル (26) 「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。」

祭司ザカリヤの妻エリサベツに、神の恵みで子が宿されてから六か月のことです。ザカリヤにも御告げをした御使いガブリエルが、ナザレに住む処女の所に来たのです。ナザレはガリラヤ湖畔のテベリヤから南西30数キロほどの所にある村でした。

②ヨセフのいいなずけマリヤ (27) 「この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。」

その女性はマリヤという名で、おそらく十代だったでしょう。マリヤは全く無名の女性でした。彼女はヨセフという男性と婚約していました。彼はダビデの家系に属する人でした。マタイの福音書1章冒頭の系図にそのことが詳細に記されています。

③御使いのあいさつ (28~29) 「御使いは、入って来ると、マリヤに言った。『おめでとう。恵まれた方。主があなたとともにおられます。』しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。」

御使いがマリヤに告げた言葉の冒頭は「おめでとう。恵まれた方」がありました。主から届けられた祝福の言葉です。そして、主が一緒にいてくださるという、ご臨在の約束まで伝えられたのです(マタイ1:23にある「インマヌエル」についての意味を参照)。ただ喜ぶ場合もあるでしょう。しかし、マリヤは不安に包まれました。戸惑いもしました。なぜなら、自分には祝福をいただく理由が思い浮かばなかったからです。

### 2. マリヤへの具体的な御告げ (30~34節)

①みごもって (30~31) 「すると御使いは言った。『こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。』」

そんな不安の中にあるマリヤに対して、御使いは、優しく言いました。「こわがることはありませんよ、マリヤ」。そして、一連のことは神からの恵みであることを伝えた上で、重大なことを述べました。①マリヤがみごもること、②男の子を産むこと ③名はイエス(「救い」あるいは「主は救い」という意味)とつけられるべきこと、が告げられたのです。

②いと高き方の子と (32~33) 「『その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終

## わることはありません。』

さらに、①その子は偉大な人となって、②とても高いところにいらっしゃる方の子と呼ばれ、③神はダビデの王位をその子に与える、というのです。それは先週学んだイザヤ書の9章のメシヤ預言のなかにも預言されていました。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私達に与えられる。主権はその肩にあり、その名は不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座について、その王国を治め…」(6、7節)。生まれて来る方は、民が待ち望んでいた救い主であり、全世界の人々にとっての希望であることが伝えられているのです。

③どうしてそのようなことが (34) 「そこで、マリヤは御使いに言った。『どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。』」

しかし、マリヤはそんなに気高く畏れ多いことを、突然に言われても出てくる言葉は、自分にそんなことが起こるはずがないと伝えます。彼女にとつての現実は、いわば婚約状態で、おとめでしたから、子どもが生まれることはない、率直に述べています。

### 3. 神にとって不可能なことはない (35~38節)

①聖霊が臨み (35) 「御使いは答えて言った。『聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。』」

しかし、御使いの言うことは、マリヤの考えをはるかに越えたところにありました。それは①聖霊がマリヤの上に臨むこと、②いと高き方の力がマリヤをおおうこと、③誕生する者は聖なる者、神の子と呼ばれるようになるというのです。聖霊によってマリヤは身ごもり、生まれる子こそ救い主であると告げられたのです。

②エリサベツも (36~37) 「『覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは一つもありません。』」

その証左の一つとして、親類エリサベツが、年が進んでいるのに今では六か月の男の子を宿しているということがあげされました。そして、「神にとって不可能なことは一つもありません!」という力強いお言葉が告げられたのです。

③おことばどおり (38) 「マリヤは言った。『ほんとうに、私は主のはじめです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』こうして御使いは彼女から去って行った。」

ここまで語られて、マリヤも心のうちに神からの信仰が宿されました。「あなたのお言葉通り、この身になりますように」。なんと、純心で素直な信仰の応答でありましょう。

『展開と結論』 マリヤはどこにでもいる若い女性でした。何か特別に優れた能力を持ってはいませんでした。そんな彼女に御告げがあったのです。「受胎告知」と言われますが、それは聖く莊厳な時でした。マリヤは神の恵みによって身ごもると告げられたのです。生まれる子は、ダビデの王位を継承する存在であることが伝えられました。彼女は「どうしてそんなことがありますまい」と応えるしかありませんでした。それに対して御使いは、聖霊によってマリヤの胎に宿されることを告げ、「神にとって不可能なことはない」と教え導かれたのです。マリヤは瞬間、考えが変えられました。「自分は主のはじめです。あなたのお言葉通りこの身になりますように」と告白したのです。それは、マリヤに与えられた信仰告白でした。

それでは、マリヤの信仰のどこに大切なポイントがあるのでしょうか。それは、①自分を第一にする心を捨てたということです。自分の常識や固定観念にとらわれませんでした。それでは何が優先したのかと言えば、神を第一にする信仰です。人間の知識を越えた、神の知恵を受け入れる信仰です。人間的にはあり得ないことも、聖霊の御力によって事がなされるとマリヤは信じたのです。②さらに、彼女は「神にとって不可能なことは一つもありません。」というお言葉を受け入れました。私たちの主は、全知全能の神です。全てをご存知の主は、どんなこともおできになるのです。あなたは5000人の給食を5つのパンと二匹の魚からなされた、主の御力を信じていますか。バルテマイの目を見るようにしてくださった主の御力を信じていますか。神にとって不可能なことはないのです。マリヤは全能の主の御力を信じたのです。それは、ヨブの次のような信仰にも通じていました。「あなたには、すべてができること、あなたは、そんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。」(ヨブ記 42:2)。③それに彼女は謙遜がありました。「私は主のはじめです。あなたのお言葉どおり、この身になりますように」という告白は、神からの御言葉をそのまま受け入れる信仰でした。マリヤは、これまでに見てきたように普通の女性ですが、彼女は信仰の人でした。神の前の柔らかな心が授けられていました。恥も外聞も捨てて従いました。

この女性が主に選ばれ、その胎に救い主が宿されることになったのです。御使いの言葉には「聖なる方」とありますが、その子は罪がないお方で、罪人を救うことができる方です、そのような方を聖霊の力により宿す役割をマリヤは与えられたのです。

もし、あなたがマリヤだったとしたら、御使いのお告げに対して、どのように対応しますか。あなたもマリヤと同じチャレンジを受けているのです。いずれにせよ、マリヤもそうでしたが、主に真正面から向かうときに、主は相応しく導いてくださるのです。主なる神を信じるかのか、信じないのか。主の御言葉を受け入れるのか、受け入れないのか。この方と共に歩むのか、歩まないのか…。クリスマスの朝。イエス・キリストのご降誕を覚える、この朝にこの方が、私たちを本当に救ってくださる聖なるお方であることを信じ、「お言葉通り、この身になりますように」と告白していきましょう。